

## 選択体系機能文法 (SFL) を 日本語に應用する際の問題点

堀 素子

### 1. 言語間の差

SFLは、いうまでもなく基本的に英語をベースにおいて考案された理論である。このことは英語話者である研究者が絶えず断っていることで、今更あらためて言及するまでもないが、この理論に深入りすればするほど考え方も英語を基本とする方向に行きがちなのは、われわれ自身が常に気が付いていることである。分析の対象を英語とする場合にはそうでなければならないが、われわれの母語である日本語を対象にする場合にはこの点に特に注意しなければならない。なぜなら、英語に熟達していればいるほど、英語的思考方法が自然に感じられて、思わず知らずそれをそのまま日本語にも当てはめてしまう場合が多々あるからである。

母語である日本語はなかなか客観的観察の対象となりにくいため、英語的尺度で眺める方がより明確にその姿が把握できるという特典がある。しかも日本語を基本にして確立された理論はまだ生まれていない。このような研究状況のギャップがあるため、ある一群の言語学者の中には、英語の眼鏡で見えるものだけを日本語の中に見ようとする傾向があったし、おそらくいまもその姿勢は変わっていないだろう。彼らの目的が言語構造とその規則に関する理論の普遍性を証明することにあるとすれば、2つの言語に同じ理論を当てはめるのは当然で、それに合致しない現象は無

視するか、あるいは理論に合うように歪めるかのいずれかになるのも仕方のないことであろう。

しかしながらSFLは基本的にそのようなことを目指す理論ではない。これは Halliday が繰り返し言っているように、各言語がどのような system によってその言語固有の function を realize しているかを探り出すための理論である。すなわち、言語は使用者がその目的に応じて自在に意味を作り上げる素材であり、その素材を結び合わせる方法が system である。たまたま Halliday の母語が英語であるため英語が基本となっているが、他の言語に應用可能な部分もあれば不可能な部分もある。むしろSFLを道具として英語と他言語との違いを発見することこそ各言語の特性を見出すもっとも優れた方法ではないだろうか。われわれの多くは英語教師であるため、英語自体の分析にも精通しなければならないが、それと同時に母語である日本語にもこの理論を適用したい気持ちになるのも研究者として当然のことである。すでに本理論で毎年いくつかの日本語の分析が行われているので今後この傾向はますます盛んになると思われる。そのような時期に今一度、SFLの日本語への應用について基本的なことを考えておきたい。SFLの Metafunction の現れ方が、英語と日本語とでどのように違うのか、次にそれぞれの function 別に見てみよう。

2. Interpersonal Function

英語の基本形は Mood (Subject<sup>^</sup>Finite)<sup>^</sup>Residue (Predicator<sup>^</sup>Complement<sup>^</sup>Adjunct) で示される。たとえば下の(1) (Halliday

1994: 79)がそれである。これは affirmative declarative sentence であるが、negative とか interrogative とか imperative とかへの転換はすべて Mood 内の Subject と Finite で行われる。たとえば次の(2)–(5)に示す通りである。

1. *Sister Susie 's sewing shirts for soldiers.*  

Subject	Finite	Predicator	Complement	Adjunct
Mood		Residue		
  
2. *Sister Susie isn't sewing shirts for soldiers.*  

Subject	Finite	Predicator	Complement	Adjunct
Mood		Residue		
  
3. *Is Sister Susie sewing shirts for soldiers?*  

Finite	Subject	Predicator	Complement	Adjunct
Mood		Residue		
  
4. *What 's Sister Susie sewing for soldiers?*  

Complement	Finite	Subject	Predicator	Adjunct
Residue	Mood		Residue	
  
5. *Sew shirts for soldiers, Sister Susie.*  

Finite/Predicator	Complement	Adjunct	Vocative
Mood	Residue		

(1)は平叙文肯定で Mood は Subject に Finite が続く、(2)は平叙文否定で Mood 内の Finite が negative になっている、(3)は疑問文で Mood の Subject と Finite の順序が入れ替わっている、(4)は Complement を WH で尋ねる疑問文で WH-Complement が文頭に来てしかも Mood の Subject と Finite の順序が入れ替わっている、(5)は命令文で Mood には Subject は無く Finite (Present tense) は Predicator に含まれている。いずれも相手に対する働きかけ、すなわち断言しているの

か、否定しているのか、たずねているのか、命令しているのか、を前提としている。これは言語の基本ともいべき姿で、相手への働きかけを持たない言語は存在しない。その意味でこの Interpersonal Function はたとえ形態は異なってもどの言語も持っている普遍的なものといえよう。たまたま英語の基本形は上のような形を取っているが日本語ではどうであろうか。上の(1)–(5)を日本語にしてみよう。

6. シスター・スージーは 兵隊のためにシャツを 縫っ ています。

Subject	Adjunct	Complement	Predicator	Finite
Mood	Residue		Mood	

7. シスター・スージーは 兵隊のためにシャツを 縫っ ていません。

Subject	Adjunct	Complement	Predicator	Finite
Mood	Residue		Mood	

8. シスター・スージーは 兵隊のためにシャツを 縫っ ていますか？

Subject	Adjunct	Complement	Predicator	Finite
Mood	Residue		Mood	

9. シスター・スージーは 兵隊のために何を 縫っ ていますか？

Subject	Adjunct	Complement	Predicator	Finite
Mood	Residue		Mood	

10. シスター・スージー、 兵隊のために シャツを 縫いなさい。

Vocative	Adjunct	Complement	Predicator/Finite	
	Residue			Mood

命令文(10)を除く(6)–(9)の日本語文は、平叙文、疑問文、肯定文、否定文を問わずいずれも Subject<sup>^</sup>Adjunct<sup>^</sup>Complement<sup>^</sup>Predicator<sup>^</sup>Finite の順で、Mood は Residue によって分断され、Mood (Subject)<sup>^</sup>Residue (Adjunct<sup>^</sup>Complement<sup>^</sup>Predicator)<sup>^</sup>Mood (Finite) となっている。このように Finite が文末に来るのは日本語だけでなくアルタイ語に属する言語には共通する性質で Mood の内容が英語に比べて大変複雑である。また多くの場合 Mood は Subject に関する情報を含む Finite のみで成り立っている。そのため Finite の構造が複雑で、一般に助動詞と呼ばれているものの接続の順序には厳しい規則がある。英語が語順で行っていることをすべて Finite でやっていると言ってもよい。これについては英語教育の視点から論じた Hori (1997a) がある。

### 3. Experiential (Ideational) Function

Halliday (1994 : 106) によれば、われわれは自分の外で起こっていることと内で起こっていることを別の事柄として認識している。したがって言語もそれにふさわしい形をとる。すなわち世界は 'happening, doing, sensing, meaning, and being and becoming' などの 'goings-on' から成り立ち、言語はこれらを process types として捉える。外界に行為者がいて何かの行動を行う、あるいは何かの事が起きることを表現するのが Material Process で、人の内部で生じる感情・感覚を表現するのが Mental Process、また物・人・事の間関係・関連を述べるのが Relational Process である。Halliday (1994) が各 Process の代表的なものとして挙げている英語の例文を下に示す。

- |     |                 |               |                     |            |
|-----|-----------------|---------------|---------------------|------------|
| 11. | <i>The lion</i> | <i>caught</i> | <i>the tourist.</i> | (Material) |
|     | Actor           | Process       | Goal                |            |

12. 

<i>Mary</i>	<i>liked</i>	<i>the gift.</i>	(Mental)
Senser	Process (affection)	Phenomenon	

13. 

<i>Today's weather</i>	<i>is going to be</i>	<i>warm and sunny.</i>	(Relational)
Carrier	Process (intensive)	Attribute	

Halliday はこれらの中間に Behavioural, Verbal, Existential の各 Process があるとしているがここでは省略する。このような視点から文/発話を分析することは個別の言語が世界をどのように切り取って眺めているかを知る手助けになる。ある言語では Actor-Goal を中心にした表現を得意としているかもしれないし、ある言語では Senser-Phenomenon を、他の言語では Relational Process の表現を得意としているかもしれない。上に示した英語はこれらの Process type の特徴を説明する手段に過ぎない。

英語は Actor-Goal を中心に記述する言語であることはよく知られている。たとえば上の(12)のように Mary が何ら動作をしないような場合でも表面上の構文は(11)と同じように、Subject<sup>^</sup>Finite/Predicator<sup>^</sup>Complement の形を取る。そのため伝統文法ではこれらは一括して Subject-Verb-Object として扱われる。また(11)と同じ内容の Mental Process を表す(14)もやはり Subject-Verb-Object の形を取る。ただしこの場合、Senser と Phenomenon の位置が交替する。

14. 

<i>The gift</i>	<i>pleased</i>	<i>Mary.</i>
Phenomenon	Process (affection)	Senser

これを日本語で言えばどうなるか。上の (12)を(15)に、(14)を(16)に和訳してみる。

15. 

メアリーは	その贈り物が	気に入った。
Senser	Phenomenon	Process (affection)

16. 

その贈り物は	メアリーを	喜ばせた。
Phenomenon	Senser	Process (affection)

大まかに見ると Senser と Process の順序が違うだけで日英ともそれほど差は無いように思われる。しかし詳しく見てみると、英語では Mary と the gift の位置が交替していること、liked が pleased に代わっていることであるが、日本語では「メアリー」と「その贈り物」の位置の交替と「気に入った」が「喜ばせた」に代わっていることに加え、「メアリー」と「贈り物」に付加されている助詞が完全に変化している。もちろん英語でも代名詞を使えば主格から目的格およびその逆の変化はあるのだが、英語であればいずれも目的格

になるはずの(12)the gift, (14)Mary が、日本語では(15)「贈り物が」(16)「メアリーを」と異なった助詞を伴っている。そしてこの助詞を交替して(15)\*「メアリーはその贈り物を気に入った」(16)\*「その贈り物はメアリーが喜ばせた」とすることはできない。ここに日英の非常に大きな違いがある。しかしこの2つが英語から見ると同じ構文を取ることから、それに合わせて日本語の方を変えて「を気に入る」の言い方を正しいとする論文があちこちで見られるのは大変残念なことである。

この日本語の Mental Process については

私が94年の ISFL で発表したものが出版されているのでそちらを参照されたい (Hori 1997b; 堀 1997c)。

#### 4. Textual Function

人がある発話をする時、あるいは文を書く時はその状況で自分の意図を一番よく反映する言い方や言い回しをする。それは発話や文が長くなればなるほど顕著になるはずである。どこにそのような意図が現れているかを見るために言語学者は以前から Theme-Rheme

という概念を導入してきた。Theme は話し手がそこで一番言いたいテーマ、Rheme はその内容である。これは話し手の心の中には明らかに存在するものであるが、それを明確に現わす仕掛けを持つ言語と持たない言語がある。たとえば日本語はそれを持つ言語で、英語は持たない言語といってよかろう。しかし明確な言語形式を持たなくても、Theme という概念は存在するはずである。Eggs (1994:272) は文頭の語によって生じる微妙な違いを英語の Theme の差として次のような例を示している。

17. But in Switzerland they give you a cognac. Here they give you tea and bikkies.
18. But they give you a cognac in Switzerland. They give you tea and bikkies here.
19. They give you a cognac in Switzerland, though. They give you tea and bikkies here.
20. They give you a cognac in Switzerland, though. Here they give you tea and bikkies.
21. But in Switzerland they give you a cognac. They give you tea and bikkies here.
22. But they give you a cognac in Switzerland. They give you tea and bikkies here.

これはもともと長い会話の中で、一人の話者が自分の娘がスイスで輸血を受けた経験を話している最後の部分である。話者が実際に発話したのは(17)で、後の(18)–(22)は比較のために Eggs が作ったものである。上の6つの文は Mood も Process type も同じであるが、構成要素の現れる順序だけが異なっている。すなわち話の意味内容はまったく同じで、話し手の相手に対する態度はいずれも肯定的で断定的で、自分の知識あるいは経験をはっきりと語っている。にもかかわらずこれらは微

妙に異なっていて、スイスでの経験を現在地と比較して話を完結するという実際の発話の(17)と比べると、(18)–(22)は話を締めくくるといふ迫力に欠ける。

このように、現実の状況の中でもっとも効果を発揮するように発話を構成するときの機能を Textual Function と呼び、英語では一般的に文頭の要素を Theme とし、残りを Rheme とする。上の(17)を(23)、(19)を(24)として下に繰り返し、Theme に下線を施す。下線のない部分が Rheme である。

23. But in Switzerland they give you a cognac. Here they give you tea and bikkies.
24. They give you a cognac in Switzerland, though. They give you tea and bikkies here.

一見して明らかのように、(24)では一般的な主語 they が2つの文で平行に繰り返されていて、(23)に見られるような Switzerland と here の比較が明瞭ではない。この話者はず

っとスイスでの経験を話してきて最後にスイスとこの国(多分オーストラリア)を比べて一連の話を締めくくっているのである。Eggs が作成した他の例文でも、ほんの少し

の順序のちがいが原文の持つ力強さを欠く要因となっていることがわかる。

言語形式として Theme を示す語を持たない英語は、このように語順によって Theme を示唆しているといえよう。そこで問題となるのはたとえば(17)のように接続詞が冒頭に来た場合であるが、Halliday はこれをも Theme とするといっている。なぜならその文法機能が何であれ、冒頭の語は文全体を1つのメッセージとしてまとめる ('organizes the clause

as a message' Halliday 1994 : 38) 機能を担っているからである。つまり、ある語が冒頭にあるから Theme として認定されるのではなく、英語では必然的にそれがメッセージをまとめる役目をするからである、という。

たとえば Interpersonal Function のところで例示した文でそれを見てみよう。上で(1)–(5)に示した例文を下に(25)–(29)として繰り返し、Theme に下線を施す。

- |   |
|---|
| 25. <u>Sister Susie's</u> sewing shirts for soldiers.     |
| 26. <u>Sister Susie</u> isn't sewing shirts for soldiers. |
| 27. <u>Is</u> Sister Susie sewing shirts for soldiers?    |
| 28. <u>What</u> 's Sister Susie sewing for soldiers?      |
| 29. <u>Sew</u> shirts for soldiers, Sister Susie.         |

(25)と(26)では Theme は Sister Susie で、このような nominal group が Theme になる場合がもっとも多く、英語では基本の形である。ところが(27)は上の2文と同様、Sister Susie を話題にしているにもかかわらず、冒頭の語は Is という Finite である。このような yes-no question を発するとき話者が一番言いたいことは、'I want you to tell me whether or not' (Halliday 1994 : 45)、すなわち「次のことの是非を答えてくれ」ということ、つまり発話が質問であることを示すことが Theme である。(28)の WH-question では話者の意図は 'I want you to tell me the thing' that Sister Susie's sewing for soldiers (Halliday 1994 : 46) であって、この WH-element が

Theme であるのは当然であろう。(29)のような命令文では話者は 'I want you to do something' (Halliday 1994 : 47) といっているのであって、Predicator が Theme となる。否定命令文の場合は don't と次に来る動詞が Theme になる。このように Halliday は、nominal group 以外の語でも冒頭に来るものはすべて Theme としている。

ということは、たとえば次のような文では冒頭の thus や in the same way が Theme ということになる。Halliday はこれらは上の疑問文、命令文の冒頭の語と同様、unmarked Theme であるといっている (Halliday 1994 : 47-52)。

30. Thus you can't store protein.  
31. In the same way you can't store protein.

しかしながらこのような conjunctive や Adjunct だけでは文全体の Theme を構成する力が弱い ('they may not exhaust the thematic potential of the clause' Halliday 1994 : 52)。どうしても Subject, Complement, Adjunct のような Mood Structure の要素を

考慮しなければならない。その結果が Multiple Themes となるのであるが、そうすると今度はどこでこの Multiple Theme が終わりどこから Rheme になるのかが問題となる。それを決定するためには別の system、すなわち representation として文を成立させる tran-

sitivityを組み込まなければならない。こうして Halliday は Textual Function の中に Experiential Function と Interpersonal Function の要素を入れざるを得なくなっている (Halliday 1994:52)。

こうして transitivity で何らかの participant role を持つ要素を topical Theme として

組み込んで Multiple Theme を認めることによってようやく clause organizer としての Theme の役目が成立するのである (Hasan and Fries 1995:xxxiv)。Halliday (1994:55) が示しているもっとも長い Multiple Theme とその構文は③2) のようである。

32.	<i>Well</i>	<i>but</i>	<i>then</i>	<i>Ann</i>	<i>surely</i>	<i>wouldn't</i>
	continuative	structural	conjunctive	vocative	modal	finite
	textual			interpersonal		
	Theme					

<i>the best idea</i>	<i>be to join the group</i>
topical	
experiential	
	Rheme

ここで注意すべきは、the best idea という contentful element にたどり着くまで Theme は終わらないということ、すなわち Interpersonal の視点から見ても Experiential の視点から見ても subject である the best idea が topical Theme として keypoint になっていることである。これは英語は Textual な視点から見ても、Subject が中心となって展開する言語であることを証明したわけで、結局は Subject まで到達しなければ Theme の function は完結しない。一方 Last year I bought those same shoes for eighty dollars in L.A. のような文では冒頭の last year は marked topical Theme で I bought those same shoes for eighty dollars in L.A. が Rheme であるという考えもある (Hasan and Fries 1995:xxxvi) が、英語話者の研究者はやはり Subject を Theme に含ませたいという気持ち強いようだ。

例えば Downing (1991:126) は、Adjuncts は意味論的にも統語論的にも participant roles を持たないので topical Theme にすべきではなく、'what the clause is about' としての資格を持つことはできないと主張している。

たとえば Away ran the terrified horse のような文では、冒頭の away を ideational Theme と見なすことはできてもそれを topic と呼ぶことは "counter-intuitive" である。文頭に来て 'what the message is about' を指すと直感できるようなもの ("agree with the intuition" 1991:128) のみを participant Themes と名付けたいという。

ここで "intuition" という語を2度も用いている Downing の文には英語話者の正直な実感がこもっているように思われる。すなわち英語の Theme-Rheme structure は content を持つ participant Theme があってはじめて 'what the message is about' の要求が満たされるのであって、Adjuncts のような語はたとえ文頭にあっても補佐的役割しか持たない spatial, temporal, situational Themes と見なしてしまう、ということであろう。Downing 自身はもちろんこのことには気づいておらず、言語一般について論じているつもりであるが、英語の生得話者でない者の目にはそれがはっきりと読みとれる。

しかしながら日本語のような言語では participant role を持つ contentful element

が文頭に来ることの方が稀で、むしろ participants が現れずに Adjuncts と Finite/Predicator だけで文が完結することが多い。SFL に理論的基礎を置くとしても、そこで議論されている英語の問題を即、日本語に当てはめて考えるのは誤りであろう。Halliday が常に言うように、言語の研究は各言語の実態から出発しなければならない。それでは日本語では Theme はどのように現れるのか、実際の会話から見てみよう。次の会話は私の自宅で収録したものである。

会話 1 八重桜

- (33) 母：今年はこんなに伸びて、二階の正面に見えて、ずっと桜ばかり見ている。  
 (34) 娘：近くで見るときはこの方がいいね、ソメイヨシノより……  
 (35) 母：そう。花びらが重なって、その濃淡っていうか、濃いうすいがとってもきれい。蕾もいいのよ。ほら、あそこに見えるでしょ、濃いピンクが？

(33)には2つの文があるが、最初の文にはハを伴う nominal group 「今年は」がある。この場面は目の前の八重桜を見ながらそれを話題にして話しているところなので topic の「桜」はすでに了解済みのことである。したがって「今年の桜」を持ち出す時には新しい Theme として出さなければならない。その意味で「今年」にハが付加されているのは、まさに 'the point of departure' を示すものといえよう。2番目の文にはハを伴う語句は無く、動作の継続を表すいわゆる現象文である。この文の Actor はもちろん話し手であるが、この隠れた「私」が Theme なのだろうか。このような1人称を省略されたと考えるか、あるいは元から存在しないと考えるかによって、隠れた Theme を認めるか否かの分かれ目になろう。私見では、「今年は」の Theme がずっと続いていて、「(去年はそれほどでもなか

ったけれど今年はこんなに近くで見えるので) ずっと桜ばかり見ている」と考えるのが、日本語話者の直感にぴったり来るように思われる。三上 (1960: 117-129) はこのような強力なハの力を「ピリオド越え」と呼び、Sasaki (1996: 92-96) もこれに倣っている。

(34)には「近くで見るとき」という Adjunct がハを伴って現れている。このように冒頭にある Adjunct は明らかに Theme を構成していると言えよう。もしこれにハが付加されていなくて(36)のようだったらどうか。冒頭にあるという点だけから見れば(34)と変わらないが、日本語としてはどうも落ち着きが悪く、(37)のように訂正したい気持ちになる。

- (36) ? 娘：近くで見るとき、この方がいいね、ソメイヨシノより……  
 (37) 娘：近くで見ると、この方がいいね、ソメイヨシノより……

しかしこうして作成した(37)は元の(34)とは微妙に意味がちがう。(34)の方は、「近くで見」ことを前提にして「その時はこの八重桜の方がいい」という意味で、(37)の方は、いま始めて近くで見ると「この八重桜の方がいい」ことを発見した意味になる。つまり、「近くで見」ことが前提になっているかどうかのちがいがあがる。すなわち話者はハの有無によって先行語句を了解済みのことと認識しているかどうかを示しているのである。この意味でこのハは Theme を表すと同時に、了解済み、あるいは前提条件を表す Given の性格を強く持っているように思われる。

では(35)はどうであろうか。このように単文をつぎつぎに重ねるようにして会話を構成していくのは日本語の特性であるが、これを Theme-Rheme structure から見るとどうなっているか。ここに英語と同じように始めから順に textual Theme, interpersonal Theme をたどって最後に experiential Theme として topical Theme に到達することができるだろうか。「花びらが重なって、その濃淡って

いうか、濃いうすいがとってもきれい」は「きれい」でようやく文が終わるのであるが、完全な1文を成しているのは最後の「濃いうすいがとってもきれい」だけで、他はこれを導き出すための導入句といってもよい。しかもそれまでの連続はちゃんとした conjunction でつながっているわけではなく、「花びらが重なって」のような一テ形と、「その濃淡っていか」のようなカを伴う疑似疑問文の挿入句をただ並列に並べているにすぎない。このような発話／文にも何らかの Theme を求めるべきなのだろうか。

この発話のしめくくり「濃いうすいがとってもきれい」はカを伴う情景描写文であるがここには何の「濃いうすい」なのかは明示されていない。それは一連の会話の流れの中で既に了解済みの事柄として話し手にも聞き手にも自明の事であるからである。状況から明らかかなことは極力省くという日本語の特徴がよく現れている例である。すなわち(35)では(33)からの話題がずっと続いていて「今年のこの八重桜」が Theme であると見るのが日本語生得話者の intuition にもっともよく適合する。換言すれば(33)–(35)はどこにも明言されていない「今年の八重桜」が Theme となって、「ピリオド越え」どころか「話者越え」を起こしていると見てよかろう。

次に書かれた文の構造がどのようになっているか、手近にある日本語の例をランダムに拾ってみよう。(38)はコンピュータ・ソフトのマニュアル、(39)は日本語の文法研究書、(40)はクレジット・カード会社が発行している会員向けの雑誌の特集記事、(41)は一般向けの総合雑誌のグラビアから、各冒頭部分である。各文で助詞ハを伴って Theme を構成していると思われる部分に下線を施す。

38. 一太郎 Ver. 6 for Windows は、ひとつ前の 一太郎 Ver. 5 for Windows とくらべて多くの機能が追加されています。しかし、いちばんの進歩はウィンドウズにとってもよく馴染んだところで

しょう。(鈴木1996: 9)

39. この本は、すくなくともつぎにあげる2つの点で旧式な文法の本である。その1つは、文法の分析・記述についての用語(あるいは概念)を、ほとんど従来の学校文法のものによったということである。(南1993: iii)
40. クアランプールは、いま建設ラッシュの真っ只中にある。それはあたかも、町全体をそっくり別の町へと造り替えんばかりの勢いで進んでいる。(VISA No.315, p.5)
41. 私達は、東京・大田区の田園調布(旧名・東調布第二)国民学校を、昭和十九年に卒業した六年一組の同級生である。附近は、すでに山の手第一の住宅地だったが、多摩川にも近く、起伏のある亀甲山古墳や宝来公園は格好なホームグラウンドだった。(『文藝春秋』1997, 5月号, p.71)

これ以上例を挙げるまでもなく、日本語にはこのようなハで始まる文が無数にある。会話でも同じである。これらハを伴う語句が Halliday のいう Theme の条件を満たしているかどうかを考えてみたい。たまたま拾った4例とも、短い文の中にハで始まる文が2つもある。(38)では「一太郎 Ver. 6 for Windows は」と「いちばんの進歩は」で、それぞれ次の Rheme 「ひとつ前の一太郎 Ver. 5 for Windows とくらべて多くの機能が追加されています」と「ウィンドウズにとってもよく馴染んだところでしょう」との切れ目を形成している。同様に、(39)–(41)のいずれもハは Theme と Rheme の境をはっきりと示している。これで見ると、日本語ではハが Theme-marker であることは疑う余地があるまい。

では、ハの無い文はどうだろうか。(41)と同じ『文藝春秋』のエッセイのうち、ハで始まっていないエッセイの冒頭部分を引いてみよう。

42. ペルーの日本大使公邸占拠事件が起こって、テレビで経過を見守っているうち、一昨年亡くなった旧友のことを思ひ出した。(阿川1997: 77)
43. 「昭和 B 級文化」を記録している。駄菓子やフリカケ、ジュース、風邪薬など暮らしに密接な商品の発売年表を作り、開発者たちの話を聞き書きしているのだ。(串間1997: 81)
44. プロ野球春のキャンプで、十二球団各地を訪ねるのを愉しみにも生き甲斐にもしていたのが、87年に高知で倒れた。(山口1997: 84)
45. もうだいぶ昔のことになるが、博多でちょっとした用事をすませてから、長崎県の諫早市を一泊二日ほどで訪ねたことがあった。(藤井1997: 87)

これらはいずれも「私は」を省略した形であろう。エッセイというジャンルではたいてい自分のことを中心に書くのであらためて「私は」を付ける必要はあるまい。しかし(44)で始まるエッセイでは、39行目に誰かが「やあやあ山口さん」と呼びかけるシーンが出て、はじめてこれまでの行動の主人公は「山口さん」であることがわかる。はて「山口さん」とは誰だろうといぶかりながら冒頭の部分を見てもどこにもヒントが無い。ふと著者名を見ると「山口洋子」とあるので、あ、著者自身の話か、とようやく納得することができる。プロ野球のキャンプを訪ねるのを楽しみにしているのが誰なのか、87年に高知で倒れたのが誰なのか、ここまで来るまで皆目見当がつかない。読者はまるで霧の中を引き回されているような感じでここまで読まされるのである。推理小説の書き出しならいざ知らず、エッセイでこのような思わせぶりの書き方はいかなものか。別にこの著者の文体批判をするわけではないが、ハによる場面設定／人物設定がなされないと、読者に相当無理な要求を押しつけることになるよい例である。次に

エッセイよりは客観的叙述をされるとされる研究書から、ハを含まない冒頭の書き出しを探してみた。

46. 畏友国分直一氏の『日本民族文化の研究』(慶友社1972年, p.487)にアイヌに関して形質人類学者、鈴木尚氏の見解をその「東北地方の古人骨」(『蝦夷』古代史研究第二集, 1956年)からの次の引用によって示している。(村山1993:12)
47. 食品のパッケージに細かい字で何か注意書きが書いてある。読むのがおっくうな母親が息子に、「いったい何て書いてあるの。」息子がそれを読んで「何でも無いよ。『開けたらさっさと食べ』って書いてあるだけだよ。」まさか「開けたらさっさと食べ」と書いてあるはずはない。(菊池1994: 18)

これらもまた1冊の本の書き出しとしてはかなり異様な感じがある。(46)はこの直後にかなり長い引用文を従えている。そしてその後の記述を読めば著者はこの引用内容に否定的な考えであることがわかる。しかしそれが分かるまでに読者は半ページ近くの専門的内容の引用文を全部読み、それに関する著者の批判を読まなくてはならない。1ページ以上にわたって著者が何を考えているのかわからないまま、難解な文を読まされるのは読者としては耐え難い苦痛である。これは著者が冒頭に次の引用文に対する自分の態度を明確に示していないためである。(47)はこの本の冒頭の「ことばを使い分ける」章の始まりの部分で、「ことばの使い分け」の身近な例を出すことから読者を自己の領分に引き込もうとしているのだろう。このような書き出しの方が一般の読者には読みやすい印象を与えるのかもしれないが、研究書としてはやや迫力に欠けるような気もする。

(42)–(47)のようなハで始まらない文は、いきなり事件の真っ直中に読者を引き込む推理小

説の冒頭のように、日本語話者の言語感覚としては唐突な印象を受けることは否めない。日本人は何となく、物事はなるべく遠くから始めて、しばらくしてから核心に近づいてもらいたいという気持ちを持っているのではないだろうか。それは他のいろいろな場面にも溢れている。たとえば挨拶のしかた、講演のはじめ方、手紙の書き方等、生活のあらゆる場面にある。出会ってすぐ用事を言うとか、時候の挨拶無しで手紙を書き始めるとかのような唐突なやり方は通常の間人間関係ではない。いわば本来の目的とは直接関係のないことをまず述べて、天候であろうと何であろうと何か共通の認識を築いて、その上でようやく話の核心に入る、というのが一般的であろう。何か「共通」のものを持つこと (common-ground) を強調するのは英語では positive politeness の strategy (Brown and Levinson 1987) に入るのだが、日本語ではその意味ではなく、相手との直接的な接触を回避するためにもっとも無難な話題を共通の土俵として用いるのであろう。このような大前提を設定するのもっとも適しているのがハを使って互いの共通の認識を確かめることである。

会話や文を開始するときにも同じ無意識のルールが働いているとはいえないだろうか。このような前提を築くための方策として、日本語はハという助詞を備えているのではあるまいか。これは一見 Theme marker として機能しているように見えるけれども、本当は単なる Theme marker ではなく、むしろ相手を驚かせないように徐々に近づき、共通の場を築く役目を果たしているように思われる。その意味では英語でいうところの Theme (topical であれ何であれ) と重なる部分も多いがずれる部分も多いのではないか。英語話者が Theme の設定に苦慮しているのは英語という言語の宿命であって、日本語にはそれほど影響は無いと思われる。それはちょうど、英語話者が Subject の設定に何ら問題を感じないのに、日本語話者は Subject の存在そのものからしてどのように扱うべきか苦慮してい

るのとよい対照をなしている。日本語の中ではこれはハとガの問題としてやや矮小化されて来た傾向があるが、実はもっと深く、言語そのものの特性に関係しているといつてよからう。その意味で英語話者が Theme のどこに悩んでいるかを知るのは大変有益なことである。

## References

- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Downing, Angela (1991) An alternative approach to theme: a systemic-functional perspective. *Word*, 42: 2, 119-143.
- Eggs, Suzanne (1994) *An Introduction to Systemic Functional Linguistics*. London: Pinter.
- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd edition. London: Arnold.
- Hasan, Ruqaiya and Peter H. Fries (1995) Reflections on subject and theme: an introduction. In Hasan, R. and P. H. Fries (eds.) *On Subject and Theme: A Discourse Functional Perspective*. Amsterdam: John Benjamins. xiii-xlv.
- Hori, Motoko (1997a) A comparative study of TENOR variables and MOOD structure in English and in Japanese. *Bulletin of Tokai Women's College*. 16: 27-40.
- Hori, Motoko (1997b) Mental process clauses in Japanese. In A-M Simon-Vandenberg, K. Davidse, and D. Noel (eds.) *Reconnecting Language: Morphology and Syntax in Functional Perspectives*. Amsterdam: John Benjamins. 297-327.
- 堀 素子 (1997c) 「日本語の感覚表現——選択体系機能文法の視点から」 *Kansai Linguistic Society Proceedings* 17. 143-153.
- Ikegami, Yoshihiko (1991) 'Do-Language' and 'Become-language': two contrasting types of linguistic representation. In Ikegami, Y. (ed.) *The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture*. 285-326.
- Maynard, Senko K. (1994) The centrality of

thematic relations in Japanese text. *Functions of Language* 1: 2, 229-260.

三上 章 (1960) 『象は鼻が長い』東京：くろしお出版

Sasaki, Makoto (1996) An analysis of realization of Theme in Japanese. *The Faculty Journal of Aichi Gakuin Junior College*. 4: 82-99.

#### Data

『文藝春秋』(1997) 5月号

「同級生交歓」 pp.70-71.

阿川弘之「大使の姿勢」 pp.77-78.

串間 努「昭和B級文化について」 pp.81-82.

山口洋子「名将の条件」 pp.84-85.

藤井淑禎「根っこたちは、いま」 pp.87-88.

菊池康人 (1994) 『敬語』東京：角川書店

南 不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』東京：大修館書店

村山七郎 (1993) 『アイヌ語の研究』東京：三一書房

鈴木哲哉 (1996) 『一太郎Ver.6/6.3 for Windows』東京：池田書店

VISA (1997) May, No. 315.

#### 注

本稿は1997年5月10日、本学で開催された「日本機能言語学会春期研究会」において発表したものを、訂正・加筆したものである。